

失われる私とそれに気づく私

——喪失における自己認識の観点から——

蒲生諒太

問題と目的

(1) 自己ならざるものの喪失と自己の喪失

現代社会を生きる私たちにはアイデンティティをめぐる問題は身近なものである。それは現代の社会状態において、雇用や住居、家族システムの流動化が起こり（バウマン、2001/2000）、アイデンティティが流動的になり、たびたび組みかえられるからと考えられる。しかし、このアイデンティティの問題はアイデンティティの確立（エリクソン、1973/1959）という伝統的な問題よりも複雑なものである。たとえば、アイデンティティを成立させる「居場所」と今いる「ここ」の不一致（蒲生、2010）などである。

「喪失」（やまだ、2007）という観点からもこの問題を考えることができる。それは他者や物の喪失によるアイデンティティの危機＝自己の喪失という問題である。喪失という体験は物や他者を失うことを意味する。引き出しにしまっていた思い出の品をなくしてしまったり、大切な家族を失ってしまったたりすることである。一方で、喪失は自分自身、たとえば、身体の一部や記憶を失うことでもある。この2つの喪失はそれぞれ自己の喪失と自己ならざるものの喪失であり、異なるものだと考えられる。しかし、物や他者の喪失が自己の喪失の感覚につながることもある。たとえば、思い出の品や大切な家族がなくなり自分の中の何かか欠けてしまう感覚のことである。

物や他者などの喪失と自己の喪失が結びつくことは、自己が場所の中での関係性によって生成されるという発想から、説明できる。自己は文脈依存的で生態学的なものであると考えられる（パーソナリティ研究での状況論をめぐる論争、佐藤、渡辺、1992や生態学的な発達研究、ブロンフェンブレンナー、1996/1979を参照）。自己はその場所に位置づけられその場所で物や他

者との関係性の中で生成される存在である（やまだ、1988、やまだ、山田、2009など）。関係性が自己を生成するという発想は、自己は社会的文脈において表明され、常に再生産される表現であるという考えに結びつく。この考えから自己ならざるものの喪失と自己の喪失の問題は次のように説明できる。社会的に表現された自己は他者によって追認される自己（「客体的自己」）である。同時に私たちはその表現された自己を生きている。この生きている自己（「主観的自己」）は身体を拠点にした原初的な感覚に満ちたものである。この客体的自己と主観的自己が一致するとき、主観的自己が客体的自己を認証するとき、私たちはアイデンティティの一致の感覚を手にする。

ここでアイデンティティは主観的自己と客体的自己の一致という二元論的図式で捉えられるが、私たちの実際の生活では二元論的に自己が捉えられることは少ない。日常生活での行為はほとんどが意識下で処理されており、日常生活の行為そのものについて私たちは自己省察的になることはほとんどない。そのため、主観的自己が客体的自己を意識するという二元論的構図はほとんどみられない。ある研究（山本、1992）では自分の状況や行為そのものに対して省察的で意識的な実践と無意識的な実践を分けている。自分の状況に対して省察的な実践は、身だしなみを整えたりキャリア設計を考えたりすること、自己を語ることなどである。日常的な意識において、特別な場合を除き、私たちは自己省察が弱い状況であることが多い。

自己ならざるものの喪失が自己の喪失につながるのはこの日常的な意識の断絶と関連していると考えられる。自己の喪失は、関係性の中で生成された自己が、物や他者の喪失に伴う関係性の喪失によって、崩れその実体性を失う体験である。それは「自己が世界に溶

解する体験」として理解される(矢野、2000)。このとき、客体的自己は失われ、沈黙(吉田、2007)＝表現の喪失が訪れる。主観的自己は、客体的自己の喪失を体験する。客体的自己の喪失によって主観的自己と客体的自己の分裂が生じる。大切な物や他者が失われるとき、その物や他者と過ごす自分自身、その生活は喪失され、「ああ、何かが終わった。失われた」と感じる。自己ならざるものの喪失によって生じる自己の喪失は、アイデンティティの感覚の喪失であり、自己が客体的なもの主観的のものに分裂する契機だと考えられる。客体的自己は喪失されるがそれは主観的自己において不完全な形であっても記憶されている。

物と他者の喪失とアイデンティティの問題について示された理解はあくまでも簡単な図式でしかなく、そこには単純な二元論と一元論が提示されたにすぎない。詳しくこの問題を考えることで私たちが注目できるのは、この一元論と二元論の間に生じるかもしれない、複雑な主客の関係性をめぐる問題である。それは、私たち(主観的自己)が私たち自身(客体的自己)をどのように認識するのか、私たち(主観的自己)が私たち(客体的自己)にどのような関係を結ぶのかということであり、まさに自己認識の問題そのものである。この問題を論じる場合、2つの論点が考えられる。

まず、自己の喪失＝分裂、アイデンティティ危機の瞬間はどのようなものか、その瞬間を私たちはどのように認識できるのかという問題である。喪失は突然生じるだけではない。喪失は緩やかに訪れることもある。精神的なすれ違いから生じる関係性の悪化や物が風化し崩れていってしまうことである。この喪失の過程においては客体的自己と主観的自己の緩やかな分裂が生じる。この緩やかな分裂において、主観的自己は客体的自己が失われていくことに気づく(意識する)と考えられる。失われる客体的自己(以下、「失われる私」とそれに気づく主観的自己(以下、「それに気づく私」)が緩やかに分裂していく。このアイデンティティの一致が崩れる瞬間は、私たちの自己認識における主客の分裂という一元論から二元論へという図式の移行の瞬間であり、その瞬間を検討することでこの図式を詳しく議論することができる。

次に、喪失は取り戻せるのか、客体的自己の消滅によって一度関係性が消えてしまった客体的自己と主体

的自己は再び関係を持つのかという問題である。失われたからといって私たちが二度とその客体的自己を体験できなくなるというわけではない。主観的自己に不完全ながら保持された記憶を思い出し語るとき、私たちは失われた物や他者、自己を語りの中で追体験できる。その場合、失われた私とそれに気づく私との間で何らかの関係が生じると考えられる。この論点を検討することによって、物や他者の喪失により失われたアイデンティティを私たちは再び取り戻せるのか、分裂した主客という二元論から再び日常的意識という一元論へという図式の移行は可能かという問題を議論することができるだろう。

アイデンティティをめぐる問題について、私たちは可能な理解の枠組みを文化的歴史的に共有してきた。それは人々の語り(映画や小説などのポピュラー・カルチャーから哲学や科学などのアカデミックな書物にまで含まれる)にみられるフォークサイコロジー(ブルーナー、1999/1990)の問題として理解される。この語りは、ときに商品化され消費され個々の語りに引用されるなどして広く影響を与える。客体的自己の喪失体験を私たちがどのように語り理解してきたのかを知ることで私たちの日常の認識が分かると考えられる。その一方で所与の物語を利用することでこのような状況をどのように認識が可能なのかという思考の可能性を探る、創造的な接近法も考えられる。この視点を導入することで、客体的自己の喪失体験とアイデンティティに関する問題をどのように捉えることができるのかを考え、現代社会を生きる私たちに有効な知見を提示することができるだろう。

(2) ブリコラ的手法

私たちは文化的に蓄積された語りの形式を利用して自己を表現することができる(マクレオッド、2007/1997)。表現は人々がある対象をどのように認識しているのかという表明であり、それ自体が認識枠組みとして理解される。表現の参考になる、すでに行われた表現(の痕跡)は物語資源とされる(蒲生、2010)。物語資源に関しては人間の生について思考した哲学者たちの作品群も小説や音楽などの娯楽作品の一群も同列のものとして扱われる。私たちは日常、自分の人生を語ったり、人生の中で行為したりするときは身近な

娯楽作品から得られた発想を用いることが多い。私たちにとって身近な物語資源であるサブカルチャーの産物はアクセスしやすい公共性の高いものと考えられる。私たちは日常生活でこのような物語資源を利用し自己を認識＝表現している。

私たちは日常、物語資源を「ブリコラージュ的手法」（以下、ブリコラ的手法）で利用している。この手法では、私たちはある目的のもと、ありあわせの物語のカケラですばらしい作品を作ろうとする。物語資源には断片的で実際の語りという工作においてはびつりの素材は存在しない。私たちは物語資源を切ったり張ったり曲げたりしながら表現活動を行っている（ブリコラージュという発想はレヴィ＝ストロース、1976/1962 を、アイデンティティとサブカルチャーの関係をブリコラージュという視点で論じたヘブディジ、1986/1979 を参照）。歴史的文化的に蓄積された語りの断片を用いることで、私の身体、体験、記憶、感覚に合った私オリジナルのものを作り出そうとする。それは当事者のアイデアや素材（その背景にある文化的歴史的要因）によって限定づけられているが、この範疇において私たちは自由に創作活動を行える。

カケラ（小さな物語）を集めてもうひとつの物語を作り出すブリコラ的手法は、小さな物語を集め読者がひとつの大きな物語を作り出す物語消費論を思い起こさせる（大塚、2001）。この議論では背景に企業などが設定する大きな物語という全体的な構造が想定されている。読者＝消費者は物語のカケラ（小さな物語）を集め、この全体構造の範疇においてのみ物語の製作者になる。大きな物語は小さな物語を内包する世界観や認識枠組みであり、私たちは物語のカケラを集めて、大きな物語＝認識枠組みを再現する。

しかし、ここでは異なる文化や歴史的背景を持つカケラ＝物語資源をブリコラ的につなぐことで独自の認識枠組みを作り出す可能性を考えたい。現代社会では流通や情報網の整備などによって異なる文化、異なる時代の物語にアクセスできるようになり、今この瞬間に生成の文脈が違う物語資源が「同時代ゲーム」（やまだ、1997）的に並存する。物語資源のバリエーションは増大し、私たちが表現するのに利用できる詳細で膨大な、差異を伴う素材が提供されている。これら生み出された文脈の異なる様々な物語資源をブリコラ的に

つむぎ合わせれば、そこに新しい物語＝認識枠組みを作り出すことができると考えられる。ここに見出されるのがブリコラ的手法の「新しい知」の生成的側面である。ここでの「知」とは、可能な認識枠組みであり、「新しい」とはその議論において必要となる未知の知識という意味であり、人類史上の新しい発見というわけではない。「新しい知」によって私たちは今までの議論にはなかった認識枠組みを利用することができるかもしれない。ブリコラ的手法はそれ自体を自覚的に行うことで物語資源を用いてその議論に必要な知＝認識枠組みを生成する研究モデルになるのである。

ブリコラ的な手法に適した素材は、物語創造の可能性を広げる、利用可能性の高いものでないといけない。語りの意味する内容が厳密に定義されておらず、いくつもの解釈が可能であるということは重要な条件である。これに見合うものとして詩や歌詞、寓話など断片的で短い物語がある。それらは短く意味が明瞭ではない部分が多く、さまざまな語りのバリエーションや解釈を誘発する。この中の1つにポピュラー音楽の歌詞がある。有名な作者の作品は高い売り上げや高頻度なメディアへの露出という点で公共性が高い。しかし、現在のようなインターネットによって情報が自由に参照できる時代（井手口、2009）では売り上げが高い＝公共性が高いという点は再度吟味しないとけない。

（3）まとめ

物や他者という自己ならざるものの喪失は、「場所や関係性の中で生じる自己」の喪失へと結びつく。この自己＝客体的自己が失われるとき、そこに表現の喪失＝沈黙が訪れ、客体的自己を生きている主観的自己に喪失の感覚が生じる。

緩やかな喪失において客体的自己という「失われる私」とそれを意識する主観的自己という「それに気づく私」の分裂が生じると予想された。そして、記憶を思い出す中で失われた私とそれに気づく私との間に何らかの関係性が生じると予想された。

状況変化の激しい現代社会を生きる私たちは客体的自己の喪失を頻繁に体験していると考えられる。この状況を認識するための枠組みとして私たちは物語資源を所有している。たとえば、小説や映画、ポピュラー音楽の歌詞などである。私たちは、この資源をブリコ

ラ的につなぎ合わせて自分自身の体験を組織化し、自分の生を表現している。この手法を自覚的に採用し、客体的自己の喪失をめぐる主客の分裂、その後の主観的自己と客体的自己の関係について考察できると思われる。この手法によって得られる知とその考察は現代の社会状況におけるアイデンティティの問題に関して新しい問題を提示するだろう。

2. 目的

ここでの目的は私たちが喪失においてどのような自己認識を持つことができるのか、考察することである。そのために自覚的なブリコラの手法を用いて客体的自己の喪失による主客の分裂に関する物語資源（ポピュラー音楽の歌詞）を分析する。

3. 方法

(1) 研究素材の選定

この研究では松任谷由実の「SUMMER JUNCTION」（アルバム『acacia(アケイシャ)』収録、2001）、「最後の春休み」（『OLIVE』、1979）、「MISTY CHINA TOWN」（『TEARS AND REASONS』、1992）、「カンナ8号線」（『昨夜お会いしましょう』、1981）以上の楽曲の歌詞を研究素材として選んだ。

ブリコラの手法では素材となる物語資源が様々な解釈や利用のバリエーションを生み出す点に注目する。そのため、ここではポピュラー音楽の歌詞という短いフレーズで解釈のバリエーションが豊富にできる対象を選んだ。ブリコラ的手法は、ありあわせの素材や道具で、ある目的のもとで創作を行う手法である。ありあわせというのは研究者にとってのものであり、研究者と素材との関係がここでは問題になる。ブリコラ的手法の萌芽的研究（蒲生、2010）では質的研究の方法論を援用して素材選定の方法が示された。そこでは「研究者が日常聴く（なじんだ）素材を研究対象として距離を置き分析し（省察し）再びなじませることで疑問や発想を生み研究を生成する」という研究モデルが提示された。ここでもこのモデルを踏襲し、21世紀初頭の日本に住む研究者にとって身近な素材、身近な曲の歌詞を対象として選んだ。また、この研究では喪失において生じる失われる私とそれに気づく私の関係性が重要な論点であり、この点をもとに素材を集める必要

がある。これらの点をもとに、研究者に身近で日ごろ口ずさむような楽曲から失われる私とそれに気づく私という主題がみられる作品を選んだ。

研究者は松任谷由実の楽曲に中学生の頃から親しみ彼女の作品を収集しコンサートに通うなど、身近なものとして接していた。松任谷由実は1972年にデビュー以後、荒井由実名義時代(1972-1976)を経て、現在までに多くのヒット作品を生み出した日本のシンガー・ソングライターである。彼女の作品は高等学校音楽の教科書に採用されるなど、物語資源としての公共性も高いと考えられる。

(2) 手順

それぞれの作品を失われる私とそれに気づく私という観点から分析した。客体的自己が失われるプロセスの中での主客の緩やかな分裂を論じた上で、その後、両者がどのような関係を結ぶのかという2つの点から分析を行った。また、分析の中で喪失における自己認識の問題を理解するための概念の生成を行った。

4. 結果

(1) 「うづくまる私」

——失われる私とそれに気づく私

ある場所でのある関係性(物や他者)の喪失により、そこで生じる自己も失われる。この緩やかな喪失の中で私たちは喪失に気づき、何かを感じる。

少しだけ眩しそうな瞳を雲が流れてた
灼けた顔もすっかりうすれて見えるね
夢みたいだった絵日記 そろそろハイウェイの出口
私は黙ってあなたのうでをとった
明日は人ごみに戻って
読みかえず余裕もない1ページにいるのね
今のあなたと 今の私と 今のふたりが
消えてゆく気づかないまま

家までの信号機 どこかで寄り道したいね
なんてことない場所でもいいから あと少し
しばらく会えなくなったって
平気なくらい フツターの別れ方しようよ
何があってもいっしょにいると誓った気持ち
口に出せず見送っていた
今のあなたと 今の私と 今のふたりが
消えてゆく気づかないで見送っていた

「SUMMER JUNCTION」

「SUMMER JUNCTION」では恋人たちの夏の出会いと別れが描かれている。この夏は2つの人生が出会い

重なったジャンクション（接合点、分岐点）である。しかし、彼らは夏の終わりに別れてしまう。それは今この瞬間、同じ車に乗り、同じ道を走っていた2人が分かれてしまうことと重なる。ハイウェイの出口に差し掛かる2人の姿を思い出す(あるいはメタ的な視点の)私は「今のあなたと今の私と今のふたりが消えてゆく気づかないまま」と感じる。二人の出会いの中で生じた「今のあなた」、「今の私」が失われる。

この楽曲において重要なことは、ここに失われる私というあなたとの関係性によって生じていた客体的自己の喪失が示されている点である。しかし、この喪失に2人が「気づかない」ため、気づく私の存在は明確ではない。この歌詞では失われる私とそれに気づく私の分裂の瞬間は描かれていないのである。

この失われる私とそれに気づく私が分裂する瞬間、自己が失われると気づく瞬間が語られるのが「最後の春休み」である。

春休みのロッカー室に
忘れたものをとりに行った
ひっそりとした長い廊下を
歩いていたら泣きたくなった
目立たなかった私となんて
交した言葉数えるほど
アルファベットの名前順さえ
あなたはひどくはなれてた
もしもできることなら
この場所に同じ時間に
ずっとずっとうずくまっていたい
もうすぐ別の道を歩き
思い出してもらえないの
たまに電車で目と目があっても
もう制服じゃない

窓の近くのあなたの机
ひとりほおづえついてみる
ふたをあけると紺のボタンが
隅のほこりにまぎれてた
もしもできることなら
この場所に同じ時間に
ずっとずっとうずくまっていたい
もうすぐ別の道を歩き
思い出してもらえないの
そよ風運ぶ過ぎたざわめき
今は春休み 今は春休み 最後の春休み
「最後の春休み」

卒業式後の春休み、私は学校の「ロッカー室に忘れたものをとりに行く」。春休みは、卒業式によって終止符を打たれた学生時代という期間の結尾であり、ある時間が終わった後の余韻とともに減びていく時間

である。

この時間の中で、学生時代という同じ時間を過ごしたが「交わした言葉」さえ「数えるほど」だったあなたに、私は思いをはせる。あなたは、学校という同じ場所で学生時代という同じ時間を過ごした接点のほとんどない人である。だが、同じ場所、同じ時間を過ごしたために最低限の結びつきを私との間に持っている。私と同じクラスのあなたは、同じクラスメートとしてこの春休みまで、私と同じ場所（同じクラス、学校）でつながっている。私はあなたとは「もうすぐ別の道を歩き」、クラスメートであったことも「思い出してもらえない」ことを予期する。2人をつなぐ象徴である制服も春休みが終われば着ることもなくなる。「たまに電車で目と目があっても もう制服じゃない」という語りは、やがて、二人は他人同士になってしまうことを暗示する。

私にとって、あなたとの唯一つながりと同じ学校に通うクラスメートだということではしかない。だから、春休みの教室（新学期には他人のクラス、他人の場所になる）という場所で「もしもできることならこの場所に同じ時間に ずっとずっとうずくまっていたい」と願う。「この場所」=教室というあなたと私をむすぶ、関係性を成立させる場所、「同じ時間」=学生時代というあなたと私が存在する時間に「うずくまっていたい」ということは、あなたとつながっている自分であり続けたいという願いなのである。

「うずくまる」という表現は、私の身体がその場所に位置するだけではなく、その場所そのものになることを示し、さらにその場所を体験することを意味する。日常的な意識での客体的自己と主観的自己が分裂していない状況が、ここでは「うずくまる」と表現されている。「うずくまる」その場所から時の流れによって引き離され（卒業させられ）、その場所そのものが消えてしまうのを私は体験する。このとき、うずくまっていた場所=失われようとしている私が眼前に対象化されて現れ失われる私の存在に気づくことになる。そのとき、私は「うずくまっていたい」、つまり主客の分裂=アイデンティティの危機を回避したいと願うのである。

「SUMMER JUNCTION」ではハイウェイの出口に差し掛かったことが、私もあなたも何を意味するのか理解していない。だからこそ、「今のあなたと今の私と

今のふたりが 消えてゆく気づかないまま」という語りが生じる。しかし、「最後の春休み」では私は春休みの終わりが学生時代、この教室にうずくまってあなたとのむすびつきの限界を感じ、場所、関係性＝私の喪失に気づいている。だからこそ、「この場所に 同じ時間に」「うずくまっていたい」と願う。喪失に気づく自己は、喪失に気づいたからこそ、その喪失から逃れたいという思いを吐露する。主観的自己是消えゆく場所と時間、そこに「うずくまる私」＝失われる私に気づくのである。

(2) 「幻としての私」、「どこにもいない私」

——失われた私とそれに気づく私

失われた私は、過去の記憶として不完全な形で主観的自分に保持される。過去の記憶は時々、語りとして現在に表現され、私たちはこれを体験する。この体験は客体的自己の取り戻し、主観的自己和失われた客体的自己が再び関係を持つということなのであろうか。

チャイナタウン 更けてゆくわ 深い霧を紅く染めて
ふと すれちがう影もなぜか 涙ぐむような
ランタン 傷だらけの心抱いて迷い込めば
ほら 海の風が耳のハープふるわせる
チャイナタウン 哀しい街 誰もひとりになりきれずに
また 眠れない夜が過ぎてゆくこうとしてる
ダウンタウン 汚れた路地 口笛吹き歩きだせば
あのとときと同じ 光る橋がにじんでは
ニューイヤーの長い汽笛
爆竹に消されるプロポーズ
笑い声やグラスの音
今でも どこかで 響いてる
チャイナタウン 灯り漏れるドアの奥から聞こえてくる
あのとときと同じ甘いメロディ 途切れ途切れ

チャイナタウン 更けてゆくわ 深い霧を紅く染めて
また ここで会える 忘れられぬ幻に
忘れられぬ思い出に
忘れられぬ ミスティ チャイナタウン

「MISTY CHINA TOWN」

「MISTY CHINA TOWN」では失われた私＝場所、関係性は「幻」として体験される。夜、語り手は一人、中華街を歩く。街は「深い霧を紅く染めて」「更けていく」。語り手は過去のある出来事を思い出す。旧正月、「ニューイヤーの長い汽笛」、爆竹が鳴る。プロポーズは爆音にかき消された。今は一人この街を歩く語り手は昔、結婚まで考えた恋人とこの街を訪れた。これは単なる過去の想起ではない。街を歩く語り手が体験する「幻」である（「ここで会える 忘れられぬ幻に 忘

れられぬ思い出に」）。

記憶は今、語り手の前に現前し、体験される。失われた私＝客体的自己とそれを体験する主観的自己の構図が再び現れる。失われた私は、それを成り立たせた場所に訪れることで記憶として想起され、幻として体験される。しかし、それはあくまでも幻であって現実ではない。そのため、この歌詞の失われた私は客体的自己というよりも、主観的自己在体験する記憶という主観的自己の延長したものである。「MISTY CHINA TOWN」では、失われた私を生み出していたあなたは存在しない。そこに生じるのは失われた私の幻であって、失われた私を取り戻されるわけではない。

失われた他者と再び失われる前と同じ場所で出会い関係を持ったなら、失われた私は取り戻せるのであろうか。この可能性には「カンナ 8 号線」の分析によって私たちは懐疑的な立場をとらざるを得なくなるだろう。

チェックのシャツが風にふくらむ うしろ姿を
波をバックに焼きつけたかった まぶたの奥に
それははかない日光写真 せつないかげろう
胸のアルバム閉じる日が来るの こわかったずっと
雲の影があなたを横切り……
思い出にひかれて
ああ ここまで来たけれども
あこのころの二人はもうどこにもいない

カンナの花が燃えてゆれてた 中央分離帯
どこへ行こうか待ちどおしかった 日よう日
いつかさそって昔のように 笑いころげたい
うらまないのもかわいくないでしょう だから気にせずに
ドアを開けて波をきこうよ……
思い出にひかれて
ああ ここまで来たけれども
あこのころの二人はもうどこにもいない

「カンナ 8 号線」

昔の恋人と、二人でドライブした海岸沿いを語り手は走る。カンナの花が中央分離帯で咲き誇り、波が輝く。過去の記憶が現実化される場面である。2 人の関係性が甦り、2 人は過去の 2 人になり、失われた私を取り戻されるように感じられる。しかし、語り手が体験する現実はこの予想に反するものであった。「思い出にひかれて ああ ここまで来たけれども あこのころの二人はもうどこにもいない」。何かが違うという感覚、2 人でいても昔のように戻れない現実があり、そこには「幻」としての 2 人、失われた私は見られない。失われた私は単なる関係性や場所の喪失というものだけ

では語れない。ここに暗示されるのは自己という独立した個人の変化が失われた私の取り戻しを拒んだということである。それは価値観や生き方の変化かもしれないし身体的な成長や衰退かもしれない。

「MISTY CHINA TOWN」では相手が存在しないことで当時と変わらない街の風景に記憶を投影することができた。それが「幻」として、失われた私の再体験を生じさせた。ここに見出せるのは「幻としての私」という主観的自己の延長した自己である。「カンナ 8 号線」では相手が存在することによってその関係性の中、変化してしまった互いを再確認してしまい、失われた私＝場所、関係性を現実に見つけられなかった。ここにあったのは「どこにもいない私」、つまり客体的自己の喪失を改めて感じ、それがどこにもないという主観的自己の空虚な感覚によって生じる自己である。

以上の分析が示すことは、客観的自己が失われた後で私たちがそれを体験する場合であってもそれは客観的自己が取り戻されるのではなく、主観的自己の延長によって生じるということである。それは記憶の投影であったり、取り戻すことができないということの気づきによって生じるものであったりする。

5. 考察

以上の分析によって、喪失によって生じる客体的自己と主観的自己の緩やかな分裂、その後における客観的自己と主観的自己の関係性について1つの可能な認識が提示された。ここではそれらをまとめながら、喪失における自己認識について考察する。

ある場所において、ある他者（物も含まれるだろう）と特定の関係性を結ぶことで、私たちは社会の中に自分自身を表現することができる。このとき、私たちはその場所の中に「うづくまる私」として存在する。ここでは改めて自分自身を対象化する必要は、特殊な状況を除いて、ほとんどないと考えられる。この場所や関係性が喪失されようとしているとき、表現された自己＝客体的自己も失われようとする。客体的自己は自らにアイデンティティの感覚を持っていた主観的自己と分裂する。主観的自己の前に失われようとしている自己＝場所が現れる（対象化される）。喪失回避への願いがこのとき生じる。やがて、喪失が完了すると失われた私とそれに気づく私は完全に分裂し、失われた私

は消滅し、記憶として不完全に保持される。

失われた私が位置していた場所を訪れ失われた他者やその関係性について思い出すことで、私たちは失われた私を「幻」として体験することができるかもしれない。それは記憶を現実の場所というスクリーンに投影する作業である。だが、その場所の中に見出される私はあくまでも「幻としての私」、主観的自己に保持された記憶、主観的自己の延長である。

実際に同じ場所で失われた他者と出会ったとしても失われた私は取り戻せない。なぜなら、自己も他者もあのとときと比べ独立した個人として変化を遂げているため、当時のような関係を結ぶのは難しいからである。つまり、両者は新たに出会いなおした自己と他者なのである。一度失った客体的自己とは主観的自己は関係を結べない。失われた私は現実には「どこにもいない私」であり、それは主観的自己が客体的自己の喪失を認めることによって生じる空虚な感覚が作る自己、主観的自己の延長なのである。

松任谷由実の歌詞分析によって得られたこのような認識（知）は喪失における自己認識やアイデンティティの問題を捉えるための1つのモデルであり、仮説である。私たちは、喪失を体験する前は、ある場所で、ある関係性の中に「うづくまっている」。その関係性や場所が危機にさらされたとき、今までの自分を対象化し（これが客体的自己）、それが失われることを拒もうとする。このときに、私たちは自分たちがどのような存在だったのかという自己言及的な認識を持つ。また、客体的自己が失われた後で私たちがそれを体験することができるかもしれない。しかし、それはあくまでも「幻」であって現実に取り戻すことはできない。

自分を取り戻せない、自己は一回性のものであるという発想は西洋近代的な同一的で変化のない自己、完成される自己という考えとは異なる。むしろ、諸行無常な東洋の発想に通じるものがある。この一回性の発想は、私たちが他者との出会いや取り結ぶ関係性は、一期一会であることを示唆する。それは、自己は生産され続けなければならない、他者と出会い続けなければならないという創造的余白を担保する一方で、発展性や完全性を否定し生の孤独を際立たせ、ニヒリズムやエゴイズムを助長するようにも思える。また、喪失への恐怖から現状を維持しようとする執着心を煽るだろ

う。

喪失が生成に結びつくという議論はすでに行われているが(矢野、2000)、その喪失と生成のプロセス自体の意味も、喪失と生成が繰り返される現代の社会状況では考えないといけない問題であろう。喪失と生成のプロセスとは、失われた私は取り戻せないため、自己喪失の後、私たちは別の自己の創造へと向かうというものである。このプロセスそのものが意味を持つというのは、これが様々な捉えられ認識されているということである。この喪失の必然性や一回性という問題について、私たちは日常的に「運命」や「生まれ変わり」という発想を持ち込んでいる。この点に関しては、現代の社会状況のアイデンティティの問題を考える上で、今後、検討を行っていきたい。

引用文献

- バウマン、ジグムント (2001/2000) *リキッド・モダニティ——液状化する社会*、森田典正訳、大月書店
- ブロンフェンブレナー、ユリー (1996/1979) *人間発達達の生態学——発達心理学への挑戦*、磯貝芳郎ら訳、川島書店
- ブルーナー、ジェローム (1999/1990) *意味の復権——フォークサイコロジーに向けて*、岡本夏木ら訳、ミネルヴァ書房
- エリクソン、エリック、H (1973/1959) *自我同一性——アイデンティティとライフサイクル*、小此木啓吾訳、誠信書房
- 蒲生諒太 (2010) *ここと居場所の不一致における自己・他者認識の可能性——ポピュラー音楽歌詞分析を通して 教育方法の探究 (14)*、pp.56-63
- ヘブディジ、ディック (1986/1979) *サブカルチャー——スタイルの意味するもの*、山口淑子訳、未来社
- 井出口彰典 (2009) *ネットワーク・ミュージッキング——「参照の時代」の音楽文化*、勁草書房
- レヴィ=ストロース、クロード (1976/1962) *野生の思考*、大橋保夫訳、みすず書房
- マクレオッド、ジョン (2007/1997) *物語りとしての心理療法——ナラティヴ・セラピーの魅力*、下山晴彦ら訳、誠信書房
- 大塚英志 (2001) *定本物語消費論*、角川書店
- 佐藤達哉、渡辺芳之 (1992) 「人か状況か論争」と

その後のパーソナリティ心理学、人文学報(231)、pp.91-114

- やまだようこ編 (1997) *同時代ゲームとしての現場(フィールド)心理学*、(やまだようこ編、*現場(フィールド)心理学の発想*、pp.13-27)、新曜社
- やまだようこ (2007) *喪失の語り——生成のライフストーリー*、新曜社
- やまだようこ (1988) *私をつつむ母なるもの——イメージ画にみる日本文化の心理*、有斐閣
- やまだようこ、山田千積 (2009) *対話的場所(トポス)モデル——多様な場所と時間をむすぶクロノ・トポスモデル*、*質的心理学研究 (8)*、pp.25-42
- 山本哲士編 (1992) *プラチックとプラクシスの差異:客観化することの客観化・1つの構造主義批判(山本哲士編、*プラチック理論への招待——暗黙の思考領域をどうとらえるか*)*、三交社
- 矢野智司 (2000) *生成する自己はどのように物語るか——自伝の教育人間学序説*、(やまだようこ編、*人生を物語る——生成のライフストーリー*、pp.251-274) ミネルヴァ書房
- 矢野智司 (2000) *自己変容という物語——生成・贈与・教育*、金子書房
- 吉田敦彦 (2007) *ブーバー対話論とホリスティック教育——他者・呼びかけ・応答*、勁草書房

- 「SUMMER JUNCTION」(JASRAC 作品コード: 089-1732-9) 松任谷由実: 作詞作曲/雲母音楽出版
- 「最後の春休み」(036-7673-1) 松任谷由実: 作詞作曲/雲母音楽出版
- 「MISTY CHINA TOWN」(012-9873-9) 松任谷由実: 作詞作曲/雲母音楽出版
- 「カンナ8号線」(020-3697-5) 松任谷由実: 作詞作曲/雲母音楽出版

※本文掲載歌詞は繰り返し部分を省略

(教務補佐)